

分詞構文の見取り図

この紙のゴール：接続詞のある2文を1文にまとめ、場面を簡潔に描く形を、読める・作れる

実力を伸ばすクラス 偏差値のめやす 50～60程度 高校範囲の5つの型を通します (確認は4択)

気づき AとB、意味はほぼ同じ。でもBは1文になっている。何が消えた？

A	When I opened the door, I found a cat sleeping on the sofa.
B	Opening the door, I found a cat sleeping on the sofa.

消えたのは接続詞 (when / because) と、くり返しの主語 (I)。残った動詞を -ing にすると、前半が「状況を添える部分」に変わります。接続詞が消えるぶん、時なのか理由なのかは読み手が文脈で補う—だからこの形は、関係がはっきりしている場面だけで使えます。否定は not を -ing の前に置きます。

整理 分詞構文の5つの型 (高校範囲の骨組み)

形	作り方	表すこと	例文
基本形	V-ing ..., S + V.	時・理由・条件など	Sitting by the window, she watched the rain. 窓辺にすわって彼女は雨を見ていた。
否定形	Not + V-ing ..., S + V.	～しないので／～せずに	Not having a car, we walked to the station. 車がないので私たちは駅まで歩いた。
完了形	Having + 過去分詞 ..., S + V.	主節より前に起きたこと	Having finished my homework, I went out for a walk. 宿題を終えてから、私は散歩に出た。
受け身	(Being) + 過去分詞 ..., S + V.	主語が「される」側	Written in easy English, this book is popular with beginners. やさしい英語なので初心者に人気だ。
付帯状況の with	with + O + 分詞 (-ing / 過去分詞)	～したまま・～しながら	He was listening to music with his eyes closed. 彼は目を閉じたまま音楽を聴いた。

主語のちがいに注意：分詞の主語は主節の主語と同じが原則です。ちがうときは主語を残します (独立分詞構文: The weather being fine, we had lunch outside.)。generally speaking (一般的に言って)・judging from (～から判断すると) は、主語をそろえなくても使える慣用表現です。分詞構文は書き言葉で力を発揮する形で、話し言葉ではふつう接続詞を使います。

確認 () 内から正しいものを選ぼう。 知識・技能

- (1) (Walking / Walked / Walk / Being walked) along the beach, I found a beautiful shell.
- (2) (Knowing not / Not knowing / Not known / Not to know) his address, I could not send the letter.
- (3) (Taking / To take / Having taken / Taken) in Kyoto, this photo shows an old street.
- (4) (Finishing / Being finished / Having finished / Finished) the race an hour before, he looked relaxed.

分詞構文の見取り図 | 解答とつまずきポイント

確認の解答

(1)	Walking	歩いたのは I = 「する」側なので -ing。
(2)	Not knowing	否定の not は -ing の前に置く。do not / does not は入れられない。
(3)	Taken	写真は「撮られる」側＝過去分詞。Being が省かれている。
(4)	Having finished	レースは「見えた」時より前の出来事＝ having＋過去分詞。

つまずき① 主語がずれる (いちばん多い誤り)

分詞の意味上の主語は、**主節の主語と同じ**が原則です。日本語は主語を省くので、そのまま英語にすると主語がずれます。下の×は、読み手には「走っていたのは電車」に見えてしまう一文法の誤りである前に、**意味が変わってしまうのがこわいところ**。書いたら必ず「-ing しているのは誰か」を確かめる習慣をつけさせます。

× Running to the station, the train was leaving the platform. → ○ Running to the station, I saw the train leaving the platform.

主節の主語を I にそろえるか、接続詞に戻す (While I was running to the station, the train was leaving the platform.)。迷ったら接続詞に戻すのが安全です。

つまずき② 否定は not を前に置く

否定形は not を分詞の直前に置きます。do not / does not は使えません—分詞は人称や時制の変化をせず、do の入る場所がないからです。完了形の否定も not having＋過去分詞 の順になります。

× Knowing not what to do, I asked my teacher. → ○ Not knowing what to do, I asked my teacher.

「分からなかったので」を Because I did not know ... と書いてから、接続詞と主語を消して not だけ残す—この手順で教えると定着します。

つまずき③ having＋過去分詞にするか、-ing のままか

主節より前の出来事なら having＋過去分詞。ただし前後関係が文脈から明らかなき (手紙を読む→返事を書く、など) は -ing のままでも自然です。**時のずれを言葉で示す必要があるか**が判断のものさして、「前のことなら必ず having」と機械的に覚えると、かえって不自然になります。逆に、主節と同時のことに having を使うのは誤りです。

つまずき④ 訳せるけれど、使えない

分詞構文は「時・理由・条件・譲歩・付帯状況のどれか」と訳の分類を覚えて終わりがちです。しかし英語の側では**1つの形**—「主語をくり返さずに状況を添える」だけで、分類は日本語に直すときの都合にすぎません。授業では**接続詞付きの2文を書かせてから1文にまとめさせる**向きで作らせると、生徒の中に「まとめる道具」として残ります。読解のほうは「-ing か過去分詞で始まり、コンマのあとに主語＋動詞が続いたら分詞構文」—-ing のかたまりがそのまま主語になる動名詞との読み分けは、コンマの有無で足りります。

授業のひとつ 導入は写真が効きます。1枚 (雨の駅・部活のひとつコマなど) を投影して「見えるものを2文で言う→1文にまとめる」の順で作らせると、書き換え練習がそのまま描写になります。話し言葉ではふつう接続詞を使う形なので、「まず接続詞で言えること」を土台にしてから紹介すると、生徒が使いどころを間違えません。

